



原生花の森の司

赤江
瀑

著者略歴

1933(昭和8)年下関に生まれる。日本大学演劇科卒。70年「ニジンスキーの手」で第15回小説現代新人賞を受賞する。73年「罪喰い」75年「金環食の影飾り」で直木賞候補となる。74年「オイディプスの刃」で第1回角川小説賞を受賞。

原生花の森の司つかさ

昭和五十五年六月十日 第一刷

著者 赤江 瀑あかえ ぼく

装幀 司・修

発行者 杉村友一

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三 郵便番号一〇二

電話東京(〇三)二六五局一二一一

定価 一、九〇〇円

印刷 理想社

付物印刷 共同印刷

製本 中島製本

製函 加藤製函

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

原生花の森の司／目次

原生花の森の司

5

ハエン縣の灰

49

黒堂

87

睡り木語り

113

八月の蟹

145

地下上申の森

167

バンガローは雲

199

原生花の森の司

原生花の森の司つかさ

死亡記事は、ごく短いものであった。

庭に青葉の陽かげがゆらぐすこし汗ばむくらいに暖かな休日の日午前どき、遅い朝食をすませたあと、ふだんそんなに物ぐさではないわたしの部屋も、独り身の気安さと勤めを持つ身の慣^{なま}わしで、日曜日ともなると、けっこうこまごました片づけものや掃除や洗濯仕事などが身のまわりには溜^{ため}っていて、人並みに女らしくそんな雑事に手をとられ、いつも一段落すると、もう正午近くになっているのが常だった。

その日もそうで、きちんと片づきあがった部屋に初夏の明るい光り風をいっぱいに入れながら、さて一服といった気分、古新聞を陽のあたる廊下へひろげて、指の爪を剪^きっていた。

硝子戸を開け放ったこの南向きの二階部屋の廊下には、庭の桐の梢が近々と葉むらを寄せていて、あふれたつ陽ざしをみどり色に染めあわあわともえひろげるこの時季が、いちばん心がくつろぐのだった。

わたしは、足の爪を剪^きっていて、手もとに眼を落^おしていたせいで、その記事に気づいた。ちょうど土踏まずのあたりの紙面に、それは載っていた。

「え？」

のばした足をあわてて引き、爪屑をわきへ掻き寄せて、すこしわたしはうろたえていた。
地方版の最下段に一段組みで、

『昔話の伝承者死ぬ』

という小さな見出しが掲げてあるだけの、ほんの短い報道記事だった。

A県青城郡青城町田末の山林で、死後五、六日とみられる老女の縊死^{いし}体が、付近の農家の人によって発見され、当人は同町田末に住む豪山秀さん（七十四歳）――農業――であることがわかった。
なお秀さんは、この地方に残る古い民話の伝承者として、町の教育委員会から無形文化財にも指定されている人である……というような簡単な内容が述べられているだけのものだった。

その短い記事をわたしが眼にした日は、五月も月末の日曜日で、古新聞の日付けは四月初旬のものであった。

「まあ」

わたしは、声に出して呟いた。

「どうして見落していたのかしら」

昔話の伝承者。豪山秀^{どうのやまひで}。

確かに、わたしの知っている人間にまちがいはなかった。

もっとも、知っているとはいっても、それは二、三度会って話したという程度の、いわば浅い付き合いでしかなかったけれど、しかしわたしにはそれなりに印象深い思い出もいくつか記憶に

残っている人物だった。

職業柄といえは大きくなるが、わたしはたいていこまめに新聞には眼をとおしていたし、わたしの勤めている高校にも新聞は何種類かあっていて、自慢ではないが、職員仲間では、その日のニュースは紙面を開くより香田先生に聞いたほうが早いと冗談口をたたかれるくらいの読みかたはしていたから、どういふかげんか、その記事を見落していたことは、なにかひどくふしぎな気がして、それだけに、束の間、小さく胸もとを礫に打たれでもしたような不意の衝撃感を味わった。

短い記事ではあったけれど、読み返せば、そのそつけないごくわずかな活字の連なりのなかにも、ふとわたしの眼をとめさせ、瞳を凝らしたくなるような文字があった。

——縊死
とか、

——死後五、六日経過の死体

などという言葉が、そうだった。

わたしは、しばらくぼんやりと、そんな活字の群れを眺めていた。

明るい木洩れ陽のゆらぐ廊下の陽溜りは、じっとしていると、睡り落ちそうになるほど暖かで、静かだった。

さやさやと桐の葉を渡る風の音だけがした。陽のかがやきや、したたりが、透きとおった風に揺すれてふりこぼれる音のようにも、それは聞こえた。

「まあ、ようおいでちゃったですの」

といって、大どかな柔らかいまなざしでわたしを迎え入れてくれた、小柄できゃしゃな体つき

の一人の老婦の微笑みや、顔や、姿が、光のなかを不意に渡ってきて、わたしの身近にやさしいかがよいの気配を伝えてくれているのではあるまいかと、ふとわたしは耳を澄ませ、眼をあげて宙に泳がせたりもした。

五月のきらびやかな明るさが、むやみに眩しく、その眩しさのなかに坐って、わたしはその日、こうして一人の人間の訃報に接したのであった。

わたしが調べた限りでは、豪山秀の死を伝える新聞記事は、ほかには見当たらないようだった。

そして、その死は、ただ『縊死』という二字の活字で説明されているにすぎなかった。

縊死。

それは、自殺と考えてよい死なのだろうか。

中国山脈の東寄りの脊梁部に近い小さな山間の聚落が、眼に浮かんた。

この日、爪を剪らなかつたら、あるいは知らずにすごしたかもしれない一人の人間の死を、爪を剪つたために知ることになったというめぐりあわせも、わたしには、なにか因縁めいて、すぐには心の外に置いて忘れ去ってはしまえない氣のする事柄なのであった。

爪を剪る。その作業を、わたしはあまり好きではない。わが身に刃物を入れるおびえがふとかなしをよびますのか。子供の頃から、爪を剪ると、その日一日、理由もなく、縁起をかつぐようなところがわたしにはあった。夜爪を剪ると不幸があるとか、親の死に目にあえないとかいう迷信を鵜呑みに信じたわけではないけれど、心のはずむ晴々とした日にしか、決してわたしは爪を剪つたりはしなかつた。身についた習慣だった。

そんなことが、この日ふと、妙に思いあわされて、心にかかつてならなかった。

豪山秀の死が、なにか身近な者の不幸をとつぜん知らされでもしたかのような心騒ぎを、わた

しの内に残したのだった。

野良仕事で陽に灼けた白粉気のない小さな顔をほころばせ、静かな童女のような声で、
「昔、そがな話があったんじゃそうな。さての……」

と、語り出すときの秀の、ほんのり薄桃色をおびたぼったりとした唇が、鮮明によりみがえってくるのである。

見つめていると、老いを忘れさせられるあやしい精気さえ含んで花びらのようにあどけない、ひらひら動く唇だった。

わたしは、その死亡記事を丹念に鋏で切り抜いて、床の間の壁に飾鉾でとめ、椿の花を一輪、生けた。

わたしはじめて豪山秀に出会った日、青城郡青城町の田末の里は、椿の花が咲きこぼれていた。

2

青城郡は、わたしの住んでいる同じA県内にあったが、中心都市A市に隣接するわたしのいる町からは、かなり遠隔の山岳地帯に位置している。地図の上では、A県の北東部にあたる県境近くの郡部である。

国鉄A駅から支線で二時間ばかり、山間のC市で別の支線に乗りかえてさらに二時間近く山脈を縫って入らねばならない。

青城の駅は、田んぼのなかに待ち合いベンチが一つ備えつけられた駅舎が建っているだけの、無人駅である。

戸数五十戸たらずの農家は、せまい盆地の山裾にとりついて、一望のんびりとした長閑な眺めの村里だった。

わたしが最初にこの村を訪れたのは、四年前の春であった。

わたしはその頃、童話や、児童文学を書いていた。いや、それは書いていたといえるほどの代物ではなかったが、大学時代に友人にすすめられてはじめてのが病みつきで、下手の横好きともいうか、子供向きの物語や短い小説などをあれこれと独りで考えるのがたのしくて、ときには同人雑誌などへも発表したり、専門誌に投稿したり、読まれる読まれないは二の次で、とにかくそんな手仕事みたいに独りでこつこつ童話の世界を造りあげたり、また毀したりする作業が、自分でも性に合っている気がし、教職についてからも、もうかれこれ十七、八年、なんとなくこれだけは続けてきた。いわば、童話を書くことは、わたしの趣味のようなものだった。

「あなた、お伽話もけっこうよ。でも、そろそろ、自分の子供にさ、それを聞かせることを考えたら？」

以前は、身内の者たちや親しい同僚なんかにも、よくそんなふうにいわれたものだ。

「まさか童話作家に、あなた、職変えするわけでもないんですよ。所帯を持ったって、できるじゃない。そりゃあ、打ち込むのはいいわよ。でも、女には、時期時期つてものがありますからね。童話一本、わき目も振らないのもいいけれど、今でなきゃできないこともあるのよ。それをすませて、家庭を持って、人生、態勢整えて、それからだって遅くはないですよ。あなたが今、童話に夢中な時間。それを全部とはいわないわ、せめて半分だけでも、いいわ。殿方とのことを考える時間に、振りあてなさいよ。でなきゃ、あなた、もう四、五年もしてごらんない。ばたっと縁遠くなっちゃうわよ。それからあわてたって、遅いのよ」

その『もう四、五年』も、とっくの昔に過ぎてしまい、今ではもう誰もそんな話は持ち出しもしなかったが、わたしはべつに『童話一筋にわき目も振らず打ち込んで』きたつもりもなく、そのために、『殿方とのかを考える時間』を失ったとも思っていないなかったけれど、傍（はた）の眼には、そんなふうに映っていたのかもしれない。

教務をはなれば、童話のことを考えて過ごす時間が多かったのも事実だし、年頃のほかの同僚たちのように、男性職員仲間とのつき合いに積極的に加わるような機会もすくなかったことは確かである。そして、結果的にはわたしは、行きそびれて婚期を逸した中年女教員、早くいえばオールド・ミスの、『それからあわてたって、遅いのよ』という言葉どおりの生活を、現在送っているのである。

しかしそれも、世のなかのなりゆきで、ほかの人間たちが思うほど、わたしは童話造りに夢中になったり、没頭していたわけでは決してなかった。ただ教職の余暇に、好きではじめる趣味のように、たとえば人がテニスをやるように、手芸やお花を習うように、書道や絵をたのしむように、わたしは童話を書いていたにすぎないのであった。

童話を職業にするつもりなど無論チリほどもなかったし、児童文学作家として世のなかに名を出したいなどという大それた望みも、持ちあわせてはいなかった。

煎じつめれば、子供話を考えたり、書くことがたのしかったし、それが性分に合っていて、ついずるずるとやめられずにきたというのが、正直なところ本音だった。

だが、自分では趣味ではじめた手遊びごとだと思っ（は）ていても、かつて傍（はた）の人間たちにはそうは見えなかったように、そのことにとりかかると、わたしは無我夢中になり、なり振（は）りかまわず没頭し、寝食忘れて打ち込んでいるとしか見えない状態に、陥（は）っているらしかった。そんなところ

が、どうもわたしにはあるようだった。

自分で自覚はしていなくても、他人の眼には、そう見えるらしいのだ。骨身をけずって苦心惨憺しているかに思える様子を、わたしは見せるらしいのである。

「あんなに苦しまなくなったって、よかりそうに」

と、誰かにいわれたこともある。

「どんな深刻な、血みどろなお話ができあがるのかと、思っちゃうわよ。およそ童話の世界とは無縁な顔ね。あれで、よく、夢いっぱい、たのしさいっぱいなんてお話が、出てくるわね」

そういわれれば、わたしにも、わからなくはないのである。

わたしはけっこうたのしんで童話を造っているのだけれど、かりに手遊びではあっても、その仕事にかかっているときは、わたしはわたしなりに、真剣にもなるし、一途な気合いも入っている筈である。そんなときのわたしの様子が、第三者には、きっとそんな具合に見えるのだろう。髪ふり乱して、思い鬱して、途方にくれて、意氣踴躍と、苦悶の深間に突き落されてでもいるかのように。

それは、仕方のないことである。わたしがそうではないといっても、他人にそう見えるのなら、改めようもないことである。

童話を考え、童話を書くときにだけ、わたしがそんな外貌を身にまとうといわれれば、わたしはきっと、そんな様子や外貌を身にまどわなければ、童話の書けない人間に生まれついてでもいるのであろうから。

そのせいで、男も寄りつきにくく、二の足を踏むのだといわれれば、それも仕方がないではないか。わたしは、童話を書くことが好きな女なのだから。書くたのしみを知ってしまった女なの